

伊平屋・伊是名の水産業

野 原 全 勝

- 1) 水産業の沿革——鰹漁の盛衰——
- 2) 活気づく水産業——もずく養殖の登場——
- 3) 残された課題 人・組織・環境（いま、“もずく”が危ない!）

調査時点：1983年8月16日～21日

調査地：伊平屋村、伊是名村

両島とも、在来の追い込み、刺し網、一本釣りのほか素もぐり、貝類の採取といった伝統的漁業が盛んである。昭和52年ごろから両島にもずく養殖がとり入れられ、それぞれ1億2千万円～2億円の年間水揚げをなしている。これは全漁獲高の70％に達するものである。

このような水産業のブームは、実は、両島において二度目のできごとである。かつて、この島々は12隻もの鰹漁船を建造して、活躍した歴史をもっているのである。以下は、今回のもずく漁が、基幹産業である農業とバランス良く発展するかどうか、に、関心を持ちつつおこなった調査（昭和53年8月16日～21日）のまとめである。

1) 水産業の沿革——鰹漁の盛衰——

両島の水産業の歴史を『伊平屋村史』^{*}によって概観してみよう。

「本村は沖縄の北端に散在せる小島で、周囲は漁場に恵まれているが、往古から専業する人がおらず、農閑期を利用する追い込み、あるいは釣、潮干狩り等であった。（中略）明治中期頃になって、村民の海産物として真珠、海人草、貝殻類等を採取して那覇に移出していた」とあり、本格的な水産業の展開は、明治末期から大正年間にあらわれた「鰹業ブーム」以降のことである。再び「村史」に戻ろう。

「明治42年村長諸見守蔵は、村の漁業に馴れている者を各字から選んで、当時慶良間諸島では鰹業が盛んな時代であったので、彼等に鰹業をはじめさせたが、何分当時の漁船は、杉製の櫓付帆船で自由に出漁できず、慶良間諸島まで遠征させたが、成績思わしくなく中止した。その後漁業に馴れた連中は、毎年夏期間八重山へ鰹業に出稼していた」とある。

大正期に入り、漁船、漁具、技術の向上は、沖縄鰹業の面目を一新するが、ここ伊平屋列島においても最盛期を迎えることになる。沖縄本島や八重山方面で技術を習得した漁師達を中心になって、各部落に株組織をつくり、発動機船を建造して競って鰹業を開始した。大正10年に

※ 『伊平屋村史』のほかに『伊平屋列島文化誌』（仲田清英編著）、『伊是名村誌』（中本弘芳編）がある。

は伊平屋村漁業組合が組織され、字勢理客で石油発動機船が建造され、鰹業に従事している。字前泊で根路銘五郎外 14 名が、尖閣での鰹業従事の経験を活かし大正 11 年に新造船で好成績をあげ、翌 12 年には字島尻の伊波川孝助発起で 島尻漁業組合を設立し、二隻の新造船で鰹業に従事し、成功している。

このような鰹業の予想以上の成功は、村民のブームを呼びおこし、ついに「村の基本財産預金を一時流用して、各字の漁業者に配分貸付」るにいたって、その頂点に達し、両島で 12 隻もの鰹漁船が誕生した。

このようにして沖縄県鰹業の全盛期が到来したものの、漁場が遠くなってきたことと、餌不足、技術の未熟さもかさなって全般的に不漁が続き、営業不振から多くの組合が債権者に船舶を引き揚げられるか、あるいは売却解散の憂目にあい、昭和初期まで頑張ったのは、字我喜屋と字島尻である。島尻では餌不足に備えて 100 噸の大型船（竜宮丸）を購入し、鹿児島から餌を取り寄せて操業したが不成功におわっている。昭和 3 年に政府の遠洋漁業船助成を得て、100 噸 200 馬力の大型船寿丸を建造し、島で操業していた二隻とともに、南洋へ遠征した。我喜屋でも昭和 4 年に新造船を建造して、根気強く経営していたが、昭和 9 年に廃業し、漁船は買主とともに南方へ遠征した。沖縄の鰹漁船と漁師の大半が南洋へ出稼ぎにいき、ブームともいふべき一時期を画するものこのころを起点としている。

パラオ、セレベス、テニアンなどでの沖縄漁師の状況は、島の古老たちからの聞きとりで、知ることができる。大手の水産会社に雇傭されるが、70 隻前後の大船団を組み、1 隻に 6～7 人の沖縄出身者が、技術者として乗船し、現住民に漁を教えながら操業。船籍は沖縄、千葉、四国とさまざまであるが、日本人技術者は大半が沖縄県出身者であり、伊平屋出身者も大勢いたようである。昭和 16 年、太平洋戦争突入後は、幾人かは帰省しているが、大半は軍に徴用され、軍属として輸送船に乗るなど軍務にたずさわった。

太平洋戦争後まもなく伊平屋村漁業組合を設立（昭和 21 年）して、前泊の 喜屋武隆正、島尻の高良清盛、根路銘実敬等が鰹業を再興したが永続せず、伝統的な漁法を中心とする半農半漁に戻った。

2) 活気づく水産業——もずく養殖の登場——

両島の漁業に活力がよみがえるようになったのは、沖縄の施政権返還（昭和 47）以降のことである。もとより、伊是名漁業協同組合は昭和 30 年に設立されたが、正式の漁業権も確定されていず、漁業協同組合としての役割は充分でなく、両島の漁業は依然として沈滞が続いていたのである。

昭和 48 年に漁業権が正式に復活したのを機に、伊是名漁業協同組合は名実ともにその役割をはたすようになった。県の指導もあり、翌 49 年には、伊平屋村に伊是名漁協の支部を設置し、昭和 52 年以降は、もずく養殖も軌道に乗りはじめ、活況を呈するようになった。しかし、同種同規模の両島の併存は、行政区のちがいが、交通や人的問題等に矛盾を生じせしめ、昭和 56

年3月に伊平屋漁協として伊是名から分離独立した。とはいえ、漁業権は、共同漁業権として、両漁協が共有している。

A 伊平屋島

昭和56年伊平屋漁協として分離以来、第1表、第2表にみるように、組合員数、漁船数とも増加傾向にある。とくに、漁船が1.0～5.0tのクラスが増加している。この傾向は、他の島々とも共通する点であり、漁場が遠くなったことと関連して、エンジンや装備品などの整備されたことなどが原因となっている。

第3表にみるように、漁獲高が昭和52年以来激増している。これは、この島に「もずく養殖」がとり入れられたことからである。今や、もずく漁は、島の漁業の様相を一変せしめ、生産高1億円を超す産業にまでのしあがった。

第1表 伊平屋村漁業協同組合

単位(人)

役 員	職 員	組 合 員			
			正組合員	準組合員	計
組合長 1	管理係 1	昭56	117	36	153
理 事 5	経理係 1	昭57	118	47	165
監 事 2	購買係 1 販売係 1	昭58	116	46	162

注)『村勢要覧』昭和57年版および村役所資料より作成

第2表 伊平屋村・漁船保有隻数推移

単位:(年),(隻)

年度\区分	0.5t未満	0.5～1.0t	1.0～5.0t	小 計	無動力	合 計
昭・51	8	26	4	38	37	75
昭・53	6	30	8	44	38	82
昭・56	8	35	35	78	31	109
昭・57	9	39	38	86	48	134

注)『村勢要覧』昭和51、53、56、57各年度版より作成

第3表 伊平屋村・漁獲高推移

(単位) 数量:トン 金額:千円

年度	総 数 量	漁類数量	そう類数量	総 額	漁類金額	そう類金額
昭・47	47	—	—	26,900	—	—
48	40	—	—	16,210	—	—
49	16	—	—	5,460	—	—
50	21	—	—	10,544	—	—
51	40	—	—	23,496	—	—
52	215	103	116	75,250	61,800	4,800
53	216	107	100	162,053	80,250	75,000
54	403	55	305	190,951	39,703	137,220
55	551	130	394	283,629	97,500	177,300
56	456	67	363	146,621	47,018	90,750

注)『村勢要覧』昭和51、53、56、57の各年度版より作成

栽培は、2～7人を1グループとして協同経営している。個人も少々ある。加工、販売は漁協でおこなっている。昭和58年度に新しい加工場が完成。自動化により1日10tが加工処理される。加工は、バック加工と原料加工があるが、その比率は1:99で、圧倒的に原料加工が多い。

製品販売は県漁連に10%、本土加工・流通業者に90%となっている。流通経路が、伊是名島とは全く逆の方式を採用している点興味深い。これは、昭和56年に全県的にあらわれた過剰生産のおおりで大打撃を受け、その対策として本土業者と契約生産に切りかえたためである。この契約生産で収穫時の製品価格の変動の不安が除かれ、安心して生産に励むことができる。と生産者は語っている。今後、本土市場の拡大は必至で見通しはあかるい。

このほかに、伝統的な漁法による素もぐり、追い込み、近海一本釣がある。多くは、鮮魚として販売され島内80%、県漁連へ20%の割である。タイ類、ハタ類は高値で販売されている。さらに、うに、貝類、たこなどの採取漁業もわずかではあるがおこなわれている。

この島の水産業の将来については、われわれの調査時におこなわれた「伊平屋島、地域づくりシンポジウム」(昭和53.8.17)における漁業組合長の発言につきるように思われる。すなわち「昭和53年ごろから漁港、冷凍、冷蔵、貯氷などの基盤づくりも着々とすすみ、もずく養殖の導入などにより、漁業も1～2億円産業となりつつある。しかし、これを生かすのは人である。すなわち漁業の後継者づくりである」と。

B 伊是名島

この島の漁民の人数、漁船の数など漁業の規模は、第4表にみるように、伊平屋島とほぼ似ている。大型漁船がなく、3tクラスが増加傾向にあることも共通である。

漁種も、ほぼ似ていて、もずく、追い込み(グルクン)、刺し網、1本釣り、素もぐり(クブシミ)、夜光貝、高瀬貝などである。

もともと、伊是名島は伊平屋村であったし、昭和55年までは伊平屋漁協は伊是名漁協の支部であったことなどから、また、隣っていて漁業条件も類似していることから、当然このような傾向、形態が表われるのであろう。

しかし、もずく生産の計画や流通経路にそれぞれの漁協の特色がある。まず、生産時期であるが、伊是名では、従来、12月に網のはりだしをおこない、4～6に収穫という1期作であったが、昭和58年からたねを冷蔵保存し、9月末にはりだしをおこなうという、2期作をこころ

第4表 伊是名漁協組合員数・漁船数

単位：(人)、(隻)

区分 年 度	組 合 員			漁 船				
	正組合員	準組合員	計	動力船	動 力 船			計
					～1t	1～3t	3t～	
昭和 54	91	75	165	3	52	15	—	69
昭和 58	124	72	196	2	61	48	—	111

注)『村勢要覧』昭和55年度(54合)版および昭和57年度(56合)版より作成

第5表 漁獲高

単位：千円

年 度	漁 獲 高（金 額）
昭和 54	173,981
昭和 57	195,391

注)『村勢要覧』昭和55年度(54合)版および
昭和57年度(56合)版より作成

みている これにより、生産を倍増しようというのである。すなわち、現在の2億円(第5表)を3億～4億円の大台に乗せようということである。

両島のもずく業のちがいの最大のものは、何といても流通経路である。伊平屋が昭和56年の値くずれを機に本土業者との契約生産に入ったのにたいし、伊是名では、あえて県漁連を通じてのせり販売をおこなっている。双方とも、それぞれ特色があり、甲乙つけがたい。しかし漁民にとっていずれがよいのか、興味あることである。

3) 残された課題——人・組織・環境(“もずく”が危ない!)

両島を通じて、残された課題は共通である。

まず、人の問題。これは後継者づくりである。漁民の高齢化は共通のなやみであるが、もずく養殖でUターン青年の漁業への関心もでてきている。この傾向を維持し、定着させるためには、もずく産業が産業として安定成長するか、いなか、が、最大の課題であろう。品質は、在来種(太め)、新種(いともずく)ともに優れていて問題はないと思われるが、全国の消費者にどのようにして食してもらえるかなど、宣伝・販売のルートの研究が必要であろう。

加えて、他産業(主として農業)との兼業、協業など、くみあわせの問題および生産環境、文化環境の問題がある。青年の「いきがい」の問題では、コミュニティ作りであろう。

とくに、今回の調査で緊急にそして真剣に検討されなければならないと感じたことは、両島ではじまった農業基盤整備事業(土地改良工事)による漁場汚染問題である。

もずく養殖に必要な環境は、まず第一に清らかな海水といわれている。伊是名・伊平屋のもずくの品質のよさは、まさに、この良好な環境にあるという。しかし、徐々にではあるが、この漁場に“へどろ”が混入しはじめていているという。漁民の話によれば、雑漁用の刺網にも“へどろ”の付着が始まっているとのことである。漁協で働く青年の訴えは切なるものがある。曰く、「農業は、この島の最大の基幹産業であり、島民の大多数の所得源である。従って基盤整備は急がねばならぬし、ぜひ、なされなければなりません。しかし、漁業も最近、もずく養殖の導入により将来があかるくなってきたし、われわれ青年漁民も燃えています。このような矢先に漁場の汚染が始まったのでは、われわれの目前は真暗です。陸の開発に反対はしませんが、海のこととも考えてほしいと思うのです」と。

沖縄本島中北部のバイン等農業開発による海岸汚染は、海を死に至らしめている。開発土木工事に絶対必要なのは、砂防ダムなどの措置である。とくに、沖縄県のような農地と海岸が隣

接し、しかも降水量の多い地方においては、砂防ダムなどの不十分な開発は即刻中止し、三重四重の措置を構すべきと考える。そのために、農業開発事業の予算にこれらに必要な資金を当然計上すべきである。国・県の国土保全の立場から緊急要務のことである。

両島の残された課題は、まさに、離島県・沖縄の共通の課題でもある。かつて、鰹業に命をかけた伊平屋・伊是名両村民の、新しい明星“もずく養殖産業”を消さずに発展させ、農業と漁業の調和ある“シマづくり”に、国・県・村の行政は真剣に、しかも緊急にとりくまなければならないときにさしかかっているといえよう。